
国際学会報告

アウグスティヌス国際学会について

宮 谷 宣 史

1986年9月、ローマで、会期1週間にわたる国際的なアウグスティヌス学会が開かれた。本会はアウグスティヌスの回心(386年)1600周年を記念したもので規模と内容からみて、1954年にパリで開催された生誕1600周年記念大会以来のおおがかりな国際的学会であるため、注目に価すると言えよう。

これを企画し、主催し、また会場を提供したのはローマにあるラテラノ大学教父学研究所(INSTITUTUM PATRISTICUM AUGUSTINIANUM)である。当研究所はアウグスティヌスに関する専門誌 AUGUSTINIANUM の、また、Nouva Biblioteca Agostiniana, Città Editrice. Opera Omnia di Sant' Agostino, Roma 1965 ff. の発行所として良く知られているが、A. Trapè 所長を中心に多くの優れた教父学者を擁し活発な教育・研究活動を行なっている。例えば、このスタッフが協力してまとめた“Patrologia. I Padri latini (secoli iv-v)”, Roma 1978(これは長い間未刊であった J. Quasten, Patrology vol. 3, つまり、ラテン教父の部分にあたる。アウグスティヌスについては、A. Trapè によって323頁から434頁までに詳しく記述されている。すでに英訳あり)や、Dizionario Patristico e di Antichità Christiane, 2 vols. Roma 1983-84 などの公刊によって学界に大きな貢献をしている。

今回の会議の事務局長を務めたのが、上記二著の編集者で、まだ若い学者、Angelo Di Berardino であった。学会の準備委員としては、アメリカ、イギリス、オーストリア、オランダ、スペイン、ドイツ、ベルギー、フランスなどの各国の代表的アウグスティヌス学者が協力したのみならず、講演や発表を担当して内容をもりあげた。

15日(月)の午後に学会は始められた。初めに、アウグスティヌス派修道会の代表、P. M. ノランと所長のトラベによる挨拶があり、歓迎の言葉と同時に、本大会の意図と意義が述べられた。続いて、パリのアウグスティヌス研究所(Études Augustiniennes)

の G. Madec が “D'un Congrès à l'autre: de 1954 à 1986” と題し、学会冒頭の講演を行い、過去 30 年間のアウグスティヌス研究の総括的な報告を試みながら、様々な主題に関する重要な業績を挙げた。このなかでも特に、J. Divjak によって発見され、出版されたアウグスティヌスの新しい書簡 (CSEL 88, 1981) についてふれ、高い評価があたえられた (新発見の書簡に関する特別な学会がすでに開かれ、その成果はまとめられている。Les Lettres de Saint Augustin découvertes par Johannes Divjak. Communications présentées au colloque des 20 et 21 Septembre 1982, Paris 1983 参照)。

二日目の 16 日から 19 日までの四日間に講演や発表が、毎日ほぼ同様なプログラムでなされた。まず、午前中には、一つの共通した主題のもとに四名の人による詳しい学術講演とそれをめぐる討論がおこなわれた。この部分にはすくなくとも二か国語の同時通訳がついた。テーマとしては、回心、歴史・言語、神学、哲学と研究助成手段などがとりあげられた。午後は、七つの分会に分けられ、比較的短い研究報告と発表およびそれに続く質疑応答がなされた。ここでは、回心・倫理、歴史・言語、神学、哲学、遺産、などが主要な課題であった。

さて、本学会の全体について、またはその内容に関して詳しく述べることは不可能なので、印象に残ったことをいくつか指摘しておきたい。まず、初めの午前中に、大会の主要テーマである回心の問題に関して以下のような発表がなされた。ブカレストの J. Coman は Les facteurs de la conversion de Saint Augustin et leurs implications spirituelles (欠席のため代読)、ニューヨークの K. Kevane は Augustine's Conversion in the Perspective of Universal History、日本の宮谷が Theologia conversionis in St Augustine、パリの A. Mandouze が Du converti de Milan au convertisseur d'Hippone: rupture ou continuité? と題し、それぞれ講演したが、ここにすでに 1954 年と異なる傾向を見ることができる。前回のパリでは、回心の出来事の史実性ないしはその解釈に関心が集まったのに対して、今回のローマでは、回心の思想的側面に注意がむけられたといえよう。30 年前には、丁度、P. Courcelle の告白研究が出たあとであったことにもよるが、回心の資料問題、特に、アウグスティヌスと新プラトン主義との関係がおおく論じられたのにたいして、昨年は、アウグスティヌスの回心のもつ思想史的意義を明らかにしようとし、したがって彼の体験と思想の哲学的考察、ないしはその

現代的意義を探る態度が強かったといえる。そしてこの態度の背後には、多くのカトリックの学者、グアルディーニ、フォン・バルタザール、コンガール、ドウ・リュバック、ダニエル、ラティンガー、ベレリノなどによる優れた教父研究の成果（周知のように、それは第二ヴァティカン公会議に大きな影響をあたえた）があると言えよう。このため教父の現代性（actualité）が今日しばしば問われているが、本大会にもそれが表れていた。

このような態度は、回心をめぐる発表だけではなく、18日の午前中に神学的テーマについて話した、英国の H. Chadwick と G. Bonner に、また、19日には哲学を主題として取り上げた、ライデンの J. H. Wasink にもみられた。そして興味深いことには大会三日目に会場を訪れ、特別講演をなされた、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世にも見られた（本講演はすでに *Lettera Apostolica. Augustinum Hipponensem del Sommo Pontefice Giovanni Paolo II nel XVI Centenario della Conversione di Sant' Agostino Vescovo e Dottore della Chiesa* と題され、出版されている）。教皇は、本にして 52 頁（293 の注つき！）におよぶ長い講演で、まず回心について述べ、次に教師と牧者としてのアウグスティヌスにふれ、最後に、現代人にとってのアウグスティヌス（Agostino Agli Uomini D'Oggi）の意義を強調された。例えば、彼の真理探究の姿勢をとりあげられた。

本学会で発表したひとのかずは、155 人におよぶ。日本からは数名参加し、加藤武氏（*L'imagination créatrice chez Saint Augustin, d'après «De Genesi ad litteram»*）と片柳栄一氏（*Die erste Freiheit des Suchens — prima libertas quaerendi —*）が発表され、好評をえた。なお、発表は全て今年中にまとめられ出版される予定である。会期中に古オステリア訪問、音楽会、パーティなど楽しいプログラムもあった。